

## 緑爽会会報 No. 170

2020年10月26日発行

日本山岳会 緑爽会

發行人 富澤克禮



デザイン・制作 関塚貞亨

～～《報告》～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

## 9月山行「高尾山八十八大師巡り―その1」

小林 敏博

実施日：9月11日（金）

参加者：10名（写真参照）

当初、3月19日に予定していた「高尾山八十八大師巡り」だが、コロナ禍により中止、5月に延期したものの同様に中止。3度目の正直でようやく実施することができた。1月の初詣山行「子ノ権現」以来、緑爽会の山行としては、8ヶ月ぶりである。



(左から) 荒井正人、渡邊貞信、(標柱右後列) 小林敏博、富澤克禮、石塚嘉一、夏原寿一

(前列) 渡部温子、瀬戸英隆、鳥橋祥子、島田稔

高尾山八十八大師は明治36（1903）年、薬王院の大僧正が東国の信徒のために四国八十八ヶ所を巡拝し、高尾山内を四国に見立て各霊場の土を納めて弘法大師の御影像を安置したものと伝えられている。実際に四国を巡拝するには40～50日かかるといわれているが、高尾山では1日で巡ることが可能だ。すべてを巡拝すると、蛇滝の登山道を登り返すことになるため、今回は金比羅社周辺の大師像を除いて巡ることにした。

9時前には参加者全員が高尾山口駅前に集合した。

雨が一時降るとの天気予報だったが、真夏のような強い陽差しがまぶしい。まずは1号路登山口右にある不動院に寄り、大師巡りの案内図を手に入れる。案内図には不動院、琵琶滝、蛇滝の朱印を押す欄がある。3つの朱印を押してもらい八十八大師巡拝結願した場合には薬王院で巡拝証が授与されると記されている。不動院は八十八番札所でもあり、青銅製の大きな大師像が安置されている。→大師巡り案内図  
不動院向かいの広場北側の一段高い場所に一～八番の大師像がある。皆さん、足下に気をつけながら台座に刻まれた札所の番号と寺院の名を確かめる。巡拝した後、広場のベンチ前で出発の準備をした。



脚の調子のよくない夏原さんはリフトで上がることになり、9名で歩き始める。樹木に覆われた舗装道は意外に涼しい。琵琶滝への道標に従い6号路を登り始める。登山道はここ何日かの天候不順によりしっとりと濡れている。25分で琵琶滝に着いた。寺務所で案内図にそれぞれ朱印を押してもらう。コロナの影響で寺務所への入室はマスク着用との案内が掲示されている。渡部さんがリンゴを皆に配ってくれた。甘酸っぱさが体を癒やしてくれる。

琵琶滝から急な登山道をひと登りすると二本松に着く。ここには九～十六番の大師像が安置されている。十六番（観音寺）はなぜか石碑である。二本松では高尾病院からの道と合流、岩がちの急坂が始まる。富澤さんによると、この道は最近、病院道と言われているが、かつては行者道と呼んでいたらしい。往時は修験者が利用していたのだろう。樹林帯の中だが、登り始めるとさすがに暑い。汗が噴き出してくる。途中、水分補給で2回休む。十一丁目茶屋への最後の階段が見えると、上では夏原さんが待っていた。

十一丁目茶屋前の広場でも小休止。石塚さんが配る饅頭でエネルギーを補給する。広場脇に一つ、茶屋右には二つ、さらに蝟杉の先に四つ、神変堂の両脇に三つの大師像がある。それぞれ札所の番号・寺院名を確認する。神変堂脇では、富澤さんが斜面にある異様な植物を指差し、ツチアケビだと教えてくれた。葉のない赤茶色の茎の先端に赤いウインナーソーセージのような実がいくつもぶら下がっている。見るのは初めてだ。毎年、ここに生えるらしい。  
→ツチアケビ



男坂の108段の階段を登ると、右手に仏舍利塔への階段がある。途中、「苦抜け門」「三密の道」と刻まれた石門をくぐる。最近はコロナ禍でよく見聞きする「三密」だが、「仏教では人間の日常生活は三密 身（身体）口（言葉）意（心）の三つの働きから成り立っていて、これこそが煩惱の元」との説明があ



った。登り切った仏舎利塔正面広場には、四十二～六十三番の大師像が安置されている。百年を超える台座は苔生したり、刻まれた文字が削れたりなどして何番の大師像かよく分からないものもある。やはり一つ一つ確認しながら巡る。その後、権現茶屋前の急斜面に安置された二つの大師像を巡拝して薬王院へ向かった。

薬王院の大師堂裏にはお堂を囲むように二十四～三十六番の、また天狗社右・飯綱権現堂右石段横・奥の院裏にそれぞれ一つの大師像が安置されており、それぞれを巡拝して山頂へ向かう。丁寧に巡拝してきたことで、山頂に着くのには3時間半かかった。山頂から眺める空は透き通るように明るく、辺りにはススキの穂がいくつも出ていた。真夏のような暑さだが、秋の訪れを感じさせる。山頂広場中央にある大きな山名版を囲んで集合写真を撮り、山頂下のベンチで昼食にする。

下山は5号路に出て、富士道と呼ばれるゆったりとした広い登山道を薬王院まで歩く。道すがら富澤さんからここにはムヨウランが、ここではサイハイランが、あるいはマヤランが咲く、などと貴重な花の咲く場所を特定して解説してもらう。薬王院山門前の柵の脇にはハッカの白い花がいくつも咲いていた。薬王院から蛇滝分岐までは1号路を下った。植物に詳しい富澤さんと島田さんが時おり足を止めて、登山道脇の斜面を見上げる。その度にお二人から希少種の植物の説明をしていただいた。高尾山には、ここで初めて確認され「タカオ〇〇〇」と名付けられた貴重な植物がいくつかあるという。浄心門から4号路を少し下った登山道脇に「タカオヒゴタイ」があるというので、案内していただく。花期はこれからようだが、ヴァイオリンの形をした葉が珍しい。

蛇滝への登山道は急坂のため、蛇滝分岐で1号路を下る夏原さん、腰の具合の悪い渡部さんと別れ、8名が蛇滝へのジグザクの道を下った。高度が下がるに従い、むっとするような暑さに取り巻かれる。蛇滝では水行道場でそれぞれ朱印を押してもらう。やはりマスク着用だ。蛇滝のほうから涼しい風が吹いてくるので、ひと息入れる。蛇滝への門扉が閉ざされているため、青龍堂脇から道場内の二つの大師像を確認した。

水行道場から階段を下りたところに三つ、途中に一つ、下り立った老人ホーム金網柵内に四つの大師像を確認して巡拝予定の大師像すべてを巡り終えた。15時をとうに過ぎていたが、陽差しは相変わらず強い。蛇滝口バス停ではバス乗車組と小仏川沿いを歩く徒歩組に別れたが、高尾駅前の蕎麦店「たまの里」で合流、久しぶりに山行の打ち上げを行った。



蛇滝のお地蔵さん三体

#### (参考) 行程記録

高尾山口駅 8:55→9:00 不動院→ケーブル山麓駅前広場 9:25→9:50 琵琶滝 9:55→10:05 二本松→10:55 十一丁目茶屋 11:10→11:25 仏舎利塔 11:40→11:50 薬王院 12:20→12:40 高尾山頂(山頂下で昼食休憩) 13:30→13:55 薬王院→14:30 蛇滝分岐 14:35→15:00 蛇滝 15:15→15:40 蛇滝口バス停→16:40(徒歩組) 高尾駅

**<速報> 緑爽会創立25周年記念講演会開催！**

10月24日(土)午後、武蔵野スイングホールにて、  
標記講演会「日本山岳会エベレスト登山隊登頂から50  
年 その時エベレストで何が起こっていたか」が開催さ  
れました。120名近くの来場があり、映像を交えた神  
崎忠男会員の話に皆さんは惹き込まれていました。また、  
サプライズで、4名の当時の隊員(神山義明、長田正行、  
吉川昭、嵯峨野宏の各隊員)からお一人ずつ貴重なお話  
もしていただきました。ただ入口で消毒・検温を行い、  
会場内でもマスクの着用をお願いするといった感染拡大  
防止策を講じてのコロナ禍の開催であり、残念ながらお  
越しいただけなかった方もおられたと思います。



韓国山岳会の曹（チョ）東植さんは講師の神崎さんと親しく、日本山岳会会員（N014466）でもあります。 「ぜひ参加したかったがコロナ禍で行けないので」とお祝いをお届けくださいました。 ありがとうございます。 ご来場の方々には大変喜んでいただけたものと思いますし、会の PR もできたのではないかと思います。 講演の詳細は次号でお知らせします。

～～《寄稿/投稿》～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

## 低山漫步

瀬戸 英隆

連日高温がつづく中、月一回山行のノルマを自らに課して毎月登って来たが、この暑さには少々参っていた。が、それでもいい低山はあるだろうと考えて、ハタと膝を打ち、そうだ、あそこがいいとあわてて午前8時の電車に飛び乗った。

終点からさらにもう一つの社線に乗り、最初の駅で下車。さて登山開始だ

最初から急登。こんなに大変だったかと考え乍らふと案内書の項を思い出す。曰く、急登なのでゆっくり・・・と。そういう事だとペースを落とす。一人だとどうしても速くなるよなあ。約30分で道端にお地蔵様が出て来た。そうそうこれだよこれ。地蔵だよ。

うむ寺は近いな。山中の寺としては大型できれいな寺に参拝。100円玉一つ投げ入れる。あと半分で頂上だ。竹林の道は大小の岩がゴロゴロ。「あと15分」の道標に勇気づけられそのまま一



気に頂上に達する。標高556m。誰も居ない頂  
 上で昼食にする。ここから右に行けば有名な縦走  
 路。しかし、今日はここまで。ゆっくり食べて、  
 さあ下山とザックを背負ったら外人の母子連れ  
 が登って来た。今日こそ完全な「一人ぼっちの山」  
 との期待がこの瞬間消された。やや淋しい気持ち  
 でまた来た道を下山する。ま、いいさ、次回やっ  
 てみよう。「一人ぼっちの山」。箱根塔ノ沢の低山  
 「塔ノ峰」が終わった。(完)

## 「日光萩垣面 城数馬と五百城文哉の邂逅」

小原 茂延

山岳会が設立まじかい頃、小島烏水から社会的地位の相当高い人を発起人に加えたいので探すよう依頼を受けた武田久吉は「山草会」の城数馬に参加を持ち掛け、城も面白そうだと興味を示してその意向を受けた。当時、既に弁護士として活躍していた城は早速、山岳会の経済的助力を申し出た高頭仁兵衛の資力を志村烏嶺を仲介に面談して、人物と資産その担保を見定め、別の折には横浜のウェストン師に単独で面会しており、その際に小島の文筆家としての評をウェストンに語っている。会員番号は1番であり、もっともこれは、大正9年に番号を振るようになった際にアルファベット順としたためであって、「山岳」創刊号の会員名記載では発起人の最後となっている。本部ギャラリーの発起人の肖像写真もかつては、小島烏水から順番に並び城数馬は最後であったのだが、いつからか創立時の事情を知らぬ故か会員番号順に変えている。藤島敏男名誉会員が「山岳第62年」に書いているように、創立して数十年ほど経た頃でも城の生年すら承知していなかったという。城数馬の年譜は法曹界の後輩にあたる伊藤憲郎氏によって明らかになったもので、元治元年福岡の久留米出生の人である。司法省法学校、東大仏法科を卒業、4年後には弁護士となっている。山岳会発起人の長老格として初期の会運営を指導するという役割を担った、いわば顧問格であった。

五百城とは明治29年に城が訴訟に係る用で日光を訪れた時、山野草を育て絵も達者な五百城文哉のことを知り、稲荷川沿い萩垣面の居宅でロックガーデンの山野草や五百城文哉の作品に接し魅了されたのは想像に難くない。高山植物の採集、栽培、鑑賞などに興味を同じくした2人は終生の友となった。

五百城の画技は、高橋由一に入門し洋画を学び、農商務省山林局で精進した植物の細密画、日光東照宮の結構の美を写し取って外人観光客に人気を得ていたなど卓越した技倆を有していた。また、中央の美術界を率いていた黒田清輝が日光に逗留した折には宿所など便宜を図ったりもしている。弟子には著名な小杉未醒(放菴)がいる。やがて山草会に所属する松平康民など4人の子爵たちとも親交を結ぶ。

城はそれまでに八ヶ岳での植物探索でツクモグサ、ウルップソウ他の新種発見もしている。明治39年4月発行の「山岳」第1年第1号の城数馬による「女貌山と太郎山」によれば、8年前、城と五百城が女貌山から太郎山行を予定したが、画伯が病気で来れず修験者の案内人他1人を雇っての登山となり、その折にランの新種らしき花を見つけている。その後、2人は一緒に女貌山に登り新種と思われるランを確認し、牧野富太郎によってニョホウチドリと名付けられ、

学名は2人の名を記念して、*Orchis joo-iokiana* Makino とした。五百城文哉が小杉未醒と登山した時の文も「山岳」同号に「赤薔の一角」として掲載されていて、その冒頭に城が「此の一篇は、明治36年8月共に白馬山に登りし翌月、五百城氏が小杉未醒氏に託して予に送りし書状の全部なり・・・中略・・・五百城氏今病の為に筆を執る能はず、城棲碧(数馬)記とあるとおり、五百城は明治39年6月に42歳で早逝、城は大正13年1月59歳で世を去っている。



五百城文哉 27歳の頃



## 岡野金次郎翁の日記が寄贈される！

渡邊 貞信

さる9月23日、岡野眞氏のご厚意により、表題にある日記電子版（DVD-R）が日本山岳会資料映像委員会に寄贈されました。山岳界での調査研究に役立てて頂ければとの趣旨です。当日はルーム集会室において、金次郎翁三男満氏の長男 岡野眞氏、日本山岳会 清水義浩理事、資料映像委員会 溝口洋三委員長、図書委員会 神長幹雄委員長、渡邊の立ち合いの下、贈呈式が行われました。

岡野金次郎翁に関しては前号（169号）に掲載された「岡野金次郎ファミリーの探求」で皆様に読んで頂きましたが、記事に関してはエビデンスの補強が必要であった状況のなかで、岡野家のお孫さんから頂いた金次郎翁が残された日記が大きな力となりました。

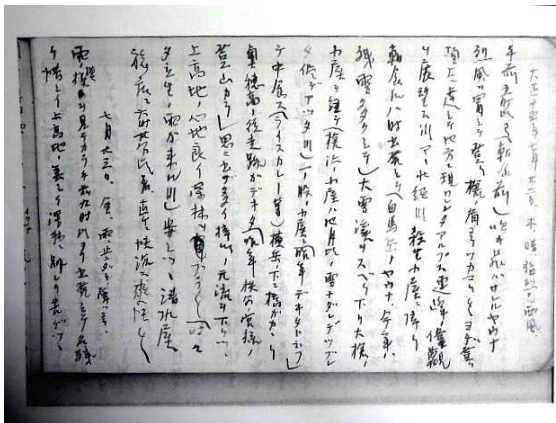
その日記をひも解いてみると、当時のありのままの状況が認められており、それによりしっかりエビデンスを得ることが出来ました。

几帳面な金次郎翁は生前、毎日欠かさずに日記をつけていましたが、残念ながら大正12年9月関東大震災による火災で、小島烏水との出会いから、乗鞍岳初登頂、槍ヶ岳登頂を始めその後の登山活動履歴を記述した前半の日記は焼失してしまいました。

しかし、その後の大正12年10月から、平塚にて散歩中に交通事故で84歳の生涯を閉じた昭和33年の当日まで35年間の日記は、幸いなことに太平洋戦争さなかの平塚大火をくぐり抜けて保存されていたのです。



中央が岡野眞氏



「大正14年槍ヶ岳登山」の記述部分

日記には日課の近郊散歩を欠かさずしていたこと、また大正末期から昭和初期（金次郎翁50歳～56歳頃）にかけては、夏の時期には強力を伴って槍・穂縦走、立山登山など健脚ぶりを発揮していること、こよなく愛した富士山には度々登山していることなどが記されており、これらを含めて生涯、自然美を謳歌して歩き続けた様子が分かります。

日本山岳会を退会した後も親戚の望月達夫を通じて日本山岳会の旧友と会ったり、榎有恒宅を訪ねたり、小島烏水との手紙のやり取りがあったことなどが記載されています。（日本山岳会の旧友と会ったことは

会報「山」171・172号に記事あり）日常生活に於いては家族との付き合いを大切にして、横浜在住時代には妻トヨを連れて歌舞伎座、明治座、帝劇等へ観劇に出掛け、松方コレクションで浮世絵を鑑賞する等エネルギーに生活していた様子も読み取れます。

この貴重な日記が日本山岳会の資料映像委員会に保管され閲覧出来るようになりましたので、今後多くの山岳界の方々のお役に立てて頂ければ幸甚です。

なお、閲覧希望の際には日本山岳会事務局に申し出れば、ご案内して頂けます。

## 『アメリカ山岳会の新型コロナウイルス対応』 余談

夏原 寿一

緑爽会会報 No. 167 (2020. 4. 27 発行) に、アメリカ山岳会 (AAC) のホームページに掲載されている新型コロナウイルスへの対応メッセージを和訳し、『アメリカ山岳会の新型コロナウイルス対応』と題して寄稿した。そのメッセージに下記の記述があり、該当する地名を5か所、例として挙げている。

『…新型コロナウイルスが、地方の町や国立公園、登山口にある町に広がることを懸念しています。これら遠隔の地にある町は、**医療施設へのアクセスが困難であり、また、お互いの結びつきの強い社会構造**ということもあって、感染の拡大を起こしやすいのです。』

その例の中に、1994年に訪れたことのある「モアブ」という町があるのを見て「全くその通りだ」と思った。そこで、今号ではモアブとその周辺地域がどんな所かを旅行記などを含めて書いてみた。

モアブはユタ州にある。ユタ州は北米大陸の西部、ロッキー山脈の西に広がる標高1300mほどの高地にあって、そこは年間降水量100~200mmという乾燥地帯だ。面積は我が国の本州ぐらいで、人口は約280万人。それは、東京23区の人口の約3分の1の人々が本州の広さに住んでいる計算になる。

また、280万人のうちの約8割が州の北東部に位置する州都・ソルトレークシティとその周辺部…面積にすると関東平野の半分ぐらいのところに住んでいる。従って、2割の人々がその他の地域に暮らしているわけで、それらの地域の人口密度は極めて低い。モアブは、そんなユタ州の南東部、ロッキー山脈に源を持つコロラド川沿いにある町で、人口は約5000人、町の端から端まで3kmほどの小さな町だ。因みに、ここから500kmほど下流にグランドキャニオンがある。

さて、モアブに行くにはソルトレークシティの空港でレンタカーを借りて350kmほど走るのだが、その3分の2は草木もまばらな荒涼とした大地だ。途中のガソリンスタンドに「この先160kmガソリンスタンドなし」などという立札が出ているのを見て、ガソリンはまだ十分あるのに「ここで満タンにしておこう」と思わず立ち寄ってしまったこともある。

そんな道を走っているとカウボーイが牛を追っているところに出会ったり、ランチに入ったマクドナルドにはカウボーイハットをかぶり拍車のついた革のブーツを履いた男がいたり、ゴーストタウンもあったりして、映画を見ているようだ。そういえば、隣接する州はネバダ、アリゾナ、ワイオミング、アイダホなど、西部劇映画を思い出させるような名前ばかりだ。

こういう環境に住んでいるモアブの人々にとっては『…**医療施設へのアクセスが困難であり、…**』そのものだ。“隣町”まで約80km。でも、その人口は1000人。人口1万人程度の町でも180kmぐらいの距離がある。人口20万人ほどのソルトレークシティまで350kmは前述の通りだ。

(参考までに：距離……80kmは東京~小田原、180kmは東京~静岡、350kmは東京~名古屋)

このような荒涼とした地域には「インディアン居留地」と呼ばれる先住民の人々のコミュニティがある。『…**結びつきの強い社会構造**…』と思われるそのような地域は、平均余命の低さ、貧困、栄養失調などが問題とされている。免疫力も低いのではなかろうか。

高速道路には、景色のいい所に20台程度の駐車スペースとトイレだけの休憩場所がある。先住民の人々はそういう所にカーペットを敷いた店を出して、トルコ石で作った指輪やネックレスなどのアクセサリー、いわゆるインディアン・ジュエリーを売っている(写真-1)。したがって、そこに

立ち寄って買い物をした客からの感染/拡大が心配されるわけで、AAC のメッセージの危惧するところであろう。

ユタ州には、5 つの国立公園がある。2019 年に富澤さんが行かれた「ブライスキャニオン国立公園」(会報 No. 160 2 頁に写真) もユタ州だ。モアブはアーチーズ国立公園とキャニオンランズ国立公園という 2 つの国立公園の近くにあって、昔はウランの採掘で栄えていたそうだが、いまは観光客で賑わっている。

アーチーズ国立公園はその名の通り 2000 を超える砂岩のアーチがある(写真-2、3)。2~3 千万年前に始まった地殻の隆起と降水による浸食で形作られた景観には人を惹きつける見事さがある。「アーチ」については後述)

公園の面積は東京 23 区の約半分。園内は車でまわれるし、アーチを巡るハイキングコースも整備されている。夏季は 40 度にもなるそうで、公園の入り口には「夏季のハイキングは早朝がお勧め」とか「2 リットルの水必携」などが書かれていた。反対に、冬季は氷点下になることが多いという。

旅はその後、グランドテトン、イエローストーン、カルガリー、バンフ、バンクーバー、ポートランドと巡った 38 日間/5200km、寄り道をしながら街道筋のモーテルに泊まり、家内にも時々ハンドルを握ってもらいながらの長丁場だった。因みに、車はフォードのトーラスという車種で、3000 cc、SH0 という馬力アップしたスポーティータイプだった。



写真-1

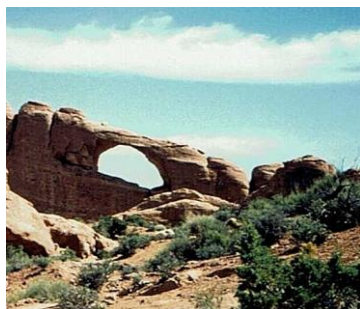


写真-2



写真-3

アーチの下に 10 人ほどの観光客が！

+ + + + + ◆ + + + + +

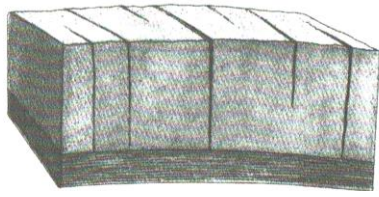
### 《アーチ/ナチュラル・ブリッジ》

上述の小文に出てくる「アーチ」と似た形状のものに「ナチュラル・ブリッジ」と呼ばれるものがある。アーチとナチュラル・ブリッジとは似ているものの根本的な違いがある。それは、アーチは降水や結氷による浸食で作られ、ナチュラル・ブリッジは川の浸食で作られるという点だ。従って、アーチの下に川は無いが、ナチュラル・ブリッジの下には、それを作った川が流れている。それぞれの出来る過程を記そう。(図版は蔵書から)

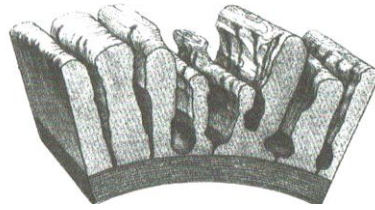
#### ・アーチ

アーチーズ国立公園のアーチは下記のように作られる。

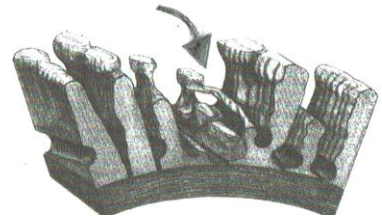




<1>



<2>



<3>

第1段階： 地殻が隆起して、その上の砂岩層に亀裂ができる。

第2段階： 地殻のさらなる隆起と降水や結氷などによる浸食で、亀裂は広がっていく。

第3段階： 浸食が進むと衝立状の岩の薄い部分に孔があく。孔はさらに浸食されて大きくなっていき、アーチが形成される（矢印）。さらに浸食が進むとアーチは崩壊する。

アーチーズ国立公園の浸食は現在も進行中なので、園内を回れば上記3段階すべての状態が見られる。

### ・ナチュラル・ブリッジ

ナチュラル・ブリッジは下記のように作られる。

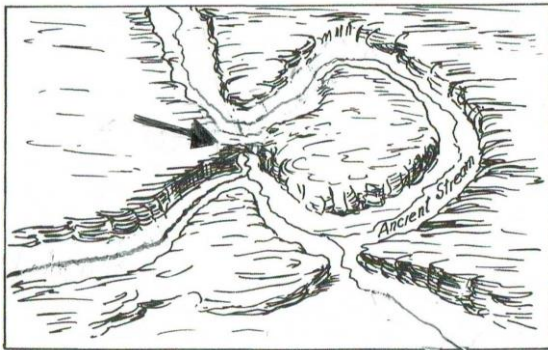


図-1 シパブブリッジ(ユタ州)

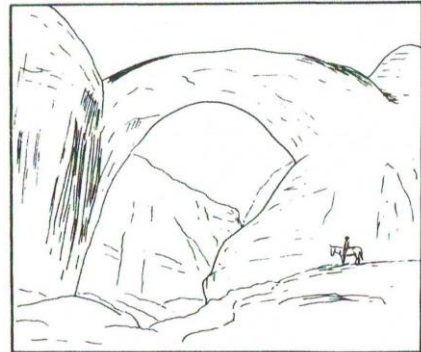


図-2 レインボーブリッジ(ユタ州)

平坦な大地を流れる川は蛇行し、川底と共に岸をも侵食していく。特に、流路のカーブの急な部分では遠心力によってカーブの外側の岸がより多く浸食される。図-1は、ユタ州を流れるホワイト川という峡谷のシパブブリッジというブリッジ（矢印）の成因を分かりやすく示した鳥瞰図だ。

図-1で、上部から流れてきた川は急カーブで右岸を侵食し、ヘアピン状に流れて反対側でも同様の急カーブで右岸を侵食していく。このように流れの接近しているところでは、その間の壁に孔があく。孔は、さらなる浸食で広がっていき遂には川を跨ぐブリッジが出来る。そして、元の流路は干上がり痕跡を残すのみとなる。

図-2のレインボーブリッジは世界で最も有名なナチュラル・ブリッジで、砂岩からなるその高さは約90m。その下には、このブリッジを作り出したコロラド川の支流、ブリッジクリークという川が流れている。自然の大いなる営みには興味が尽きない。

## 二百名山を登り終えて

荒井 正人

ガスの中で能郷白山山頂の一等三角点に触れた瞬間、肩の荷が下りた思いだった。何とか二百名山すべてのピークを踏んだのだ。10月4日9時少し前のことだった。

大人数で登り、快晴の空の下、百名山達成！と書いた横断幕を張って、皆で万歳する光景を目撃したことがある。それはそれで個人の勝手であり、結構なことだ。ただ百名山と違って、二百名山は人のあまり行かないような山が多く、道が不明瞭で藪漕ぎのある山、沢登りや岩場の山など、困難度が比較的高い。そんな山では、はしゃげないものだ。だいいち、そのようなことが可能な、皆が登ってこられるような山は残っていなかった。

深田久弥は「百の頂に百の喜びあり」との言葉を残した。今、二百名山全山を登ってみて言えるのは、この夏に登った直近の山のことなどはまだ詳細も思い出せるが、昔登った山のことは思い出せないということだ。確かにその時は喜びもあったのだろうが、何か特別のことがない限り鮮明に思い出す、などと言うことはない。当然ながら“どの山の山頂にも喜びがある”、そういう意味で久弥は言ったのだ。

二百名山を全部登ろうと思ったのは、2016年の夏に北海道でカムイエクウチカウシ山とペテガリ岳に登った頃だ。二百名山の中でも困難度の高い山に登れたのだから、その気になれば全部登れる、そう思った。一緒に登った友人は、ペテガリ岳から神威山荘に戻ったその足で、三百名山の神威岳に登りに行った。その約1か月後に農鳥岳で二百・三百名山同時に完登を達成した。そこにお祝いのシャンパンを持って行ったので、私もという気持ちになったのかもしれない。またその直後に深田クラブに入会できたことも、要素としては大きいと思う。深田クラブの入会条件・資格に二百名山を登らねばならないなどというものはない。ただ二百名山には魅力的な山が多く、それに惹かれただけのことである。深田久弥自身は、自分が登っていないというだけの理由で百名山に入らなかった山に対して申し訳ないとまで、「後記」で書いている。そんな山々に全部登ることは十分に価値があると思った。ただ南川さんの「山頂渉猟」とは比べようもない貧相な目的であるが。それを70歳になる前に全部登ろうと思ったのだった。しかし、いかに定年後の自由な身だからといっても、北海道から四国・中国地方にまで広がる山々を短い間に登ることは無理だった。それでも、昨年は8座に登り残り11座となっていたので、何とか「70歳のうちに」と達成時期を修正した。残っている山々について、冬の間に計画を立てた。新緑の頃や残雪期にも登る予定だった。

ところがコロナで計画は脆くも崩れた。緊急事態宣言解除で他県への移動が可能となり、やっと思行けると思ったが、早い時期は自粛警察などと言われるように、他県ナンバーの車には脅迫文言が貼られたそうである。実際に計画を実行に移せたのは7月12日からであった。

その際には感染拡大防止の対策として、①早朝の電車で人混みを避ける②タクシーかレンタカーを活用する（レンタカーなら他県ナンバーではない）③避難小屋かテントで泊まる（目指す山には営業小屋はないが）、などの対応を考えた。以下この夏のコロナ禍での山行を簡単に振り返る。

中央アルプス北端の「経ヶ岳」でまずは実験的な登山を行ってみた。早朝の電車で出発し、タクシーで登山口まで入る。人との接触はほとんどない。登山の常識には反するが、午後に近い時間から登る。テントを背負って行き、適当なところで寝る。避難小屋があれば利用させてもらう。大体が人気のない山なので、そもそも山中も人がいない。この行程で午後からまる1日天気が持ってくればよいので、天気図とにらめっこして出発日を決めた。もとより展望も望めない山であるから、最悪は雨でもよいのだという覚悟である。結果は大成功で、ほぼ想定した通りの形で下山できた。

迎えのタクシーがやってくるのを待つ間に雨が降って来た。雨なのに「やったー！」と叫びたいくらいであった。この結果を踏まえ、同様のスタイルで行けると確信し関西遠征を実行した。

「伯母子岳」へは新横浜始発の新幹線で京都へ行き、近鉄特急で奈良。レンタカーを借りて、龍神スカイラインを走り、ほとんど人と接触せずに登山口へ、といった塩梅だ。夜は道の駅で車中泊。

「釈迦ヶ岳」は駐車場に一番乗りで、下りで何組かとすれ違う程度であった。登りで熊の唸り声を聞いて一瞬ビビったけれど、声を出し、有るものを叩いて登った。奈良で一旦車を返し、京都に戻って新幹線で姫路へ移動した。その方が人混みを避けられ時間的にも早いのだ。再びレンタカーで「氷ノ山」を目指す。ここも午後から登って避難小屋に泊まった。大気が不安定な日々のさなかであったが、真夏のような日もあってうまい具合に登れた。

新潟の「二王子岳」「杣差岳」には山仲間が車を出してくれることになり、新発田に前泊して二王子岳を日帰り登山。下山後は胎内ヒュッテに移動し、翌日、足ノ松尾根を登って頼母木小屋（無人）に泊まった。分岐の大石山から杣差岳を往復し、ヒュッテに戻ったが、下山して林道歩きになったタイミングで雨になった、という幸運もあった。その彼と南信の山も一緒に行くはずだったが、お母様が倒れられ、やむなく一人で行くことにした。

「小秀山」「安平路山」はレンタカー利用。小秀山はまたも昼から登り山頂の小屋（無人）泊。下山して安平路山ふもとの休憩舎に泊まり（無人）、翌日往復の日帰り登山。笹藪漕ぎが長く、ダニに喰われるなどというハプニングもあった。「池口岳」はこの時は時間切れで改めて出かけた。経ヶ岳と同様にテント泊の翌日往復日帰りで登った。

こうして残る2座を、四国の「東赤石山」に登り、北陸へ移動して「能郷白山」に登れば一挙にフィナーレと思ったのだった。ところが、完登が見えて来たので記録を作ろうかと、古い山行記録を辿っていくと、何と山頂・最高峰を踏んでない山が2座もあるではないか！これはやばいなと思い、鳥肌が立ったが、登らないでは完登にならない。急遽お盆で家に来ていた孫にも「じーじ、ちょっと山に行ってくるからね」と言って「有明山」、そして8月末には友人のお母様も回復されたので「八海山」へ二人で登った。かくして清々しい気持ちで最後となる山旅に出た。能郷白山にはその友人も車で来てくれるという。達成日は9月3日、久弥の俳号「九山」に引っかけた。

またまた、ところがである。東赤石山はまさかの道見失いで時間切れ敗退。能郷白山は大聖寺の「深田久弥 山の文化館」の事務局長さんらも来てくれることになっていたが、暴風雨で断念。わざわざ車で来てくれた友人には申し訳なかったし、しばらくは気力が出なかった。それでも一人でお彼岸に東赤石山に登った。前回は九州の先輩がきてくれて朝から登ったが、今回は昼からテントを担いでの登山である。前と同じルートを取って登り、道見失いして藪漕ぎした地点で確認すると、全くの自分のうっかりミスで苦笑い。登山道の何とありがたいことよ！こうしてとうとう残る能郷白山へと準備をしていると、もう一人一緒に行きたいと言ってくれた女性が出てきて、最後を飾るにふさわしく華やかさも加わった。

ところが、またしてもである。あろうことか私が寝坊したのだ。完登の記念日は10月3日の「登山の日」が良いと思っていたのに、乗るはずの東京発朝一番の北陸新幹線が出発する頃に起きたような有様で、2時間後の列車には乗れたが、当日に登れたとしても日が暮れてしまう。二人には申し訳なかったが、翌日の文化館に行く予定と入れ替えて貰った。永平寺参道近くでおろし蕎麦を食べ、山の文化館では展示をゆっくり見ることが出来た。大野に泊まるべくレンタカーを走らせるとそば畑越しに荒島岳がすっきりと見えていた。翌日、温見峠に上がり、山頂を目指した。

その結果が、冒頭の話なのである。まさに「やれやれ」だった。今、二百名山の記録を作ってい



るが、振り返れば本当に50年前からよく登って来たものだ感慨深い。しかし、こんな「いつまでに、いくつの山を」みたいな山登りは楽しくない。もう三百名山など目指すつもりはないが、いい山には登りたいし、すでに行きたい山が目白押しである。〇〇名山などでなくても良い山はいくつもある。それらを発見し、登り続けていきたい。今の気持ちは、まさに久弥の言葉通りだ。

「山の茜を顧みて 一つの山を終わりけり 何の<sup>とりこ</sup>俘のわが心 早も急かる次の山」

～～《予告など》～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

### 1 1 月山行 「田部重治の足跡を辿る」

若い田部重治が木暮理太郎と奥高尾から笹尾根を、当時まだ珍しい縦走という登山の形で歩いたコースの一部を111年後の秋に、二人の登山家を思いながらその足跡を探して歩こうという趣向です。（二人は5月中旬のある朝早く、現在の高尾駅から小仏峠、景信山、陣馬山を越えて和田峠、浅間峠から西原峠へ、そして郷原に下り鶴峠から奥多摩の川野に出て、翌朝雲取山に登りました。）

期 日：11月12日（木）

集 合：武蔵五日市駅改札外に8時10分＜8：22発「都民の森」行に乗車＞

コース：武蔵五日市駅⇒（西東京バス）⇒上川乗⇒浅間峠⇒（笹尾根）

⇒日原峠⇒檜原街道（人里休暇村）⇒（バス）⇒武蔵五日市駅

歩行時間：休憩込み約5時間でやや健脚向けです

担 当：CL 石塚嘉一、SL 小林敏博

申 込：11月5日（木）までに石塚へ



### 1 2 月例会 忘年会 中止

「忘年会」については12月19日（土）に予定していましたが、コロナ収束状況に大きな変化がなく、ルームの使用制限が続いていますので（土曜は閉室）、残念ながら今年の忘年会は中止と致します。なお、今年は年次晩餐会も中止と決定いたしております。

### 1 月山行 初詣山行「高尾山八十八大師巡り—その2 結願」

9月の八十八大師巡りで回り切れなかった七十六番以降八十七番までを巡り、薬王院で巡拝証を受けます。もちろん初詣が主旨であり、前回参加できなかった方もご参加いただけます。

運が良ければ山頂付近で「シモバシラ」が見られるかもしれません。

期 日：2021年1月8日（金）

集 合：JR 高尾駅北口に9時

コース：高尾駅北口⇒落合⇒金毘羅台⇒1号路⇒薬王院⇒高尾山頂⇒3号路・1号路で下山

ケーブルでの下山もできます。歩行時間：休憩込み約5時間

担 当：CL 荒井正人 SL 小林敏博

申 込：1月4日（月）までに荒井へ

### 会員異動（新入会員）

辻橋明子（12226）

### ―― 編集後記 ―――

コロナの収束が見えない日々ですが、いかがお過ごしでしょうか。創立25周年記念講演会が無事開催できホッとしています。久しぶりに会員の皆様とお会い出来ました。やはり集まれてこそその同好会です。

ただ今年の忘年会中止はやむなし。早く何も気にせず山に行きたいものですね。今号も12ページとなりました。活動があり報告事項があるのが正常なのです。皆様からの投稿をお待ちしています。

次号予告＜12月25日発行の主な内容＞10月24日講演会の詳細報告、11月山行報告、その他